HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『大方広仏華厳経感応伝』訳注
Author(s)	諏訪, 隆茂
Citation	インド哲学仏教学論集, 1, 48-87
Issue Date	2012-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/hjiphb.1.48
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62108
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_p048-087_suwa.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『大方広仏華厳経感応伝』訳注

諏訪隆茂

凡例

一、幽貞編『大方広仏華厳経感応伝』については未だ国訳がなされておらず、今回、一応の試訳を提示する。

一、本書は唐の建中四年（六九〇）に成ったとされ、最初法蔵の弟子、恵英が二巻として集成したものを後に胡幽貞が一巻にまとめたという。

一、本書の内容は、『華厳経』、およびその信仰に関する霊験譚であり、「感応」の具体的な現象として『華厳経』信仰におけるさまざまな逸話を知ることができる。

一、本書のテキストは『大正新脩大蔵経』第五十一巻所収テキストを依用する。その際、テキストの提示は、底本に準ずるためできる限り旧字体で表記し、適宜、句点を補った。テキストの文字を改める場合は脚注の中でいちいち注記する。また、各頁のテキストの末尾に『大正蔵』の頁数、段、行数を示した。　例（**p.589, a3**）は五八九頁、ａ段、三行目を示す（上段はａ、中段はｂ、下段はｃと表記する）。

一、書き下し文は、現代仮名遣いにより、新字体を用いた。

一、脚注は書き下し文中の該当語の最後に付けた。

一、経文・説の引用文、言説部分には鍵括弧「　」を付けて示し、語句を補うときは丸括弧（　）を用いた。

訳　注

【テキスト】p.173, b5-23

此傳本花嚴疏主藏公門徒僧惠英。集為上下兩卷。今予鄙其事外浮詞蕪於祥感。乃筆削以為一卷。俾有見聞於茲祕乘。生難遭想。各勉受持。

西域無著菩薩弟天親。少習内氏。長通五部。初業小乘。造小乘論五百部。無著愍其聰頴未發大心。深媚小法非議大教。遂方便示疾。使人呼而誘進之。為其廣説病之因業。天親遂以兄之受持維摩法華涅槃華嚴等經。抗聲轉誦。無著凝聽。且憙且悲。天親覽經數辰。方獲信悟。深敬華嚴一乘。是諸佛境界。遂捨小師大。深自悔咎。欲以利刀斷舌為謝前過。無著誡之曰。向以汝口激揚權教。毀斥真乘。今還以汝口。讃美真乘。自滅深累。何斷舌為。天親於是入山。受持花嚴。後造十地論。有所不通。來問無著。無著未通。昇知足天。請訣慈氏。論纔絶筆。地大震動。論放光明。照數百里。舉國慶異。廣如無著傳中説。

【書き下し】

此の伝は、本と花厳の疏主蔵公門徒の僧、恵英集めて上下両巻と為す。今予、鄙を其の事の外に浮かしめ、詞を祥感に蕪らくす。乃ち筆削して以て一巻と為す。茲の秘乗を見聞すること有りて、難遭の想いを生じ、各おの勉めて受持せしめん。

西域の無著菩薩の弟、天親は、少くして内氏を習い、長じて五部に通ず。初めに、小乗を業とし、小乗論五百部を造る。無著は其れ聡頴なるも、未だ発大心せざるを愍れむ。深く小法に媚び、大教を議するに非ず、遂に方便をして疾を示す。人をし

て呼び、之を誘進せしめ、其の為に病の因業を広説す。天親、遂に兄の『維摩』『法華』『涅槃』『華厳』等の経を受持するを以て抗声し転誦す。無著は聴を凝らし、且つは喜び、且つは悲しむ。天親は経を覧ずること数辰にして、方に信悟を獲、深く『華厳』一乗を敬う。是れ諸仏の境界なり。遂に小を捨て、大に師す。深く自ら悔い咎む。利刀を以て舌を断ち、前の過を謝することを為さんと欲す。無著は之を誡めて曰く「向には汝の口を以て権教を激揚し、真乗を毀斥せり。今、還た汝の口を以て真乗を讃美せり。自ら、深累を滅す。何ぞ舌を断ずるや」と。為に天親は是に於いて入山し、『花厳』を受持し、後に『十地論』を造る。通ぜざる所有らば、来たりて無著に問う。無著も未だ通ぜざれば、知足天一に昇りて訣を慈氏に請う。論ずること纔かにして筆を絶し、地大いに震動す。論は光明を放ち、数百里を照らす。国を挙げて異を慶ぶ。広くは無著の伝中に説かるるが如し。

一「知足天」兜卒天のこと

【テキスト】p.173, b24-c12

魏朝并洲僧靈辨。童子出家。精心佛乘。專以花嚴為業。時未有疏論。每思玄旨請益無所。於是嚴飾道場。頂戴華嚴。晝夜行道六年。有餘步步流血。哀請文殊加被。誓通奧典。克誠無替。忽於一夜。感見童真。及明朗悟華嚴法界七處九會。即入微定。咬若當時。猶歷目覩耳聽心領。昔所未了。今無不通。遂於彼洲西縣兒山中。造華嚴論一百卷。

東晉沙門支法領。幼年出家。心行精志。悲嘆能仁滅後正教淩替。乃往西天詢求聖典。行至于闐。忽遇西來三藏一乘法主佛馱跋陀羅。此云覺賢。釋迦種姓甘露飯王之裔孫也。是大乘三果人。即當第三地菩薩。將華嚴梵本三萬六千餘偈來。若於經中有所不通。即

昇兜率。請問彌勒世尊。法領哀請三藏慈降
震旦流通華嚴。依請而來京師安置。行坐不
與凡同。或於窓牖間。出入無礙。同住諸僧。悉
皆驚異。咸謂之魔。

【書き下し】

魏朝并洲の僧霊辨は童子にして出家す。心を仏乗に精しくし、専ら『花厳』を以て業と為す。時に未だ疏の論有らず。毎に玄旨を思い、益を請うこと所無し。是に於いて道場を厳飾し、『華厳』を頂戴す。昼夜に行道すること六年なり。歩歩に流血すること余り有り。文殊の加被を哀れみ請う。奥典に通ずることを誓い、誠を克して替わること無し。忽ち一夜に於いて童真を感見す。明朗に『華厳』の法界、七処九会を悟るに及び、即ち微定に入る。咬若[一]の当時、猶お歴して目覩するがごとし。耳に聞いて心に領す。昔未だ了せざる所、今は通ぜざること無し。遂に彼の洲の西縣兄山中に於いて、『華厳論』一百巻を造る。

東晋の沙門支法領、幼年に出家す。心行は志を精しくし、能仁の滅後、正教の凌替するを悲嘆す。乃ち、西天に往き、聖典を詢求して、行きて于闐に至る。忽ち西来の三蔵一乗の法主仏馱跋陀羅に遇う。此こに覚賢と云う。釈迦の種姓にして甘露飯王の裔孫なり。是れは大乗の三果人、即ち当に第三地の菩薩なるべし。『華厳』の梵本三万六千餘の偈を将いて来る。若し経中に於いて通ぜざる所有らば、即ち兜率に昇りて弥勒世尊に請問す。法領は三蔵の慈が震旦に降りて華厳を流通せんことを哀請す。請に依りて京師に来たりて安置す。行坐すること凡と同じからず。或いは、窓洞の間を無礙に出入し、同住の諸僧は悉く皆驚異す。咸く之を魔と謂う。

一 「咬若」未検。

【テキスト】p.173, c12-29

衆僧遂問三藏曰。法師得
過人法耶。三藏對曰。吾今已得。諸師乃集京
城僧衆。作法羯磨。而欲擯棄。而三藏遂攝衣
鉢昇空。現諸神變騰身。坐飛南往揚洲。如鳥
翔空。舉僧愕悔。不可復追。以義熙十四年
三月十四日。於建業謝司空寺。造護淨法堂。
翻譯華嚴。當譯經時。堂前忽然化出一池。毎
日旦有二青衣。從池而出。於經堂中。洒掃研
墨給侍。際暮還宿池中。相傳釋云。此經久
在龍宮。龍王慶此翻譯故。乃躬自給侍耳。後
因改此寺為興嚴寺。同翻譯沙門惠業惠嚴
惠觀等。從三藏筆授。呉郡太守孟顗。右衛
將軍猪叔度等為檀越。至元熙二年六月十
日譯畢。後至大宗永初二年十二月二十日。
與梵本再校勘已。宋主請求那跋陀羅三藏
講此經。三藏恨以方音未通。不盡經旨。乃入
道場請念觀音。未盈七日。遂夢易漢首於梵
頭。因即洞解秦言。時號換頭三藏是也

【書き下し】

衆僧は遂に三蔵に問いて曰く「法師は過人の法を得や」と。三蔵は対えて曰く「吾、今已に得つ」と。諸師は乃ち京城に僧衆を集め、羯磨を作法して、擯二棄せんと欲す。而して三蔵は遂に衣鉢を摂めて空に昇る。諸の神変を現じ身を騰す。坐して、南へ飛び、揚洲に往く。鳥の空を翔るが如し。僧を挙げて、愕悔し、復た追うべからず。義熙十四年三月十四日を以て、建業の謝司空寺に護浄法堂を造る。『華厳』を翻訳し、当に経を訳すべき時、堂前に忽然と一池を化出す。毎日、旦に二の青衣有り。池従り出づ。経堂中に於いて、洒掃し、墨を研ぎ給侍す。際暮に還り、池中に宿す。相伝の釈に云わく「此の経は久しく龍宮に在り。龍王此を慶び、翻訳するが故に、乃ち、躬自ら給侍するのみ」と。後に因りて此の寺を改めて興厳寺と為す。

同じく翻訳の沙門恵業、恵厳、恵観等は、三蔵に従い筆授す。呉二郡太守孟顗、右衛将軍猪叔度等、檀越と為る。元熙二年六月十日に至り訳し畢る。後、大宗永初二年十二月二十日に至り、梵本と再校勘し已わる。宋主は那跋陀羅三蔵の此の経を講

ずることを請求す。三蔵は方音未だ通ぜざるを以て、経旨を尽くさざるを恨む。乃ち道場に入りて観音を請念す。未だ七日を盈ぜずして、遂に漢首を梵頭に易えるを夢みる。因りて、即ち秦の言を洞解す。時に換頭三蔵と号するは是れなり。

一 『大正蔵』の対校記に従い「檳」の字を「擯」とする。
二 『大正蔵』の対校記に従い「昊」の字を「呉」とする。

【テキスト】p.173, c29-p.174, a22

佛馱跋陀羅三藏。初至關中。問鳩摩羅什法師曰。汝所譯經論云何。什曰。法華維摩等經。中十二門等論。三藏曰。如君所譯。未出人度外。何足廣置大名。時關中盛稱三藏。為大論師。他日秦主姚興。請三藏於東宮持論。座下學士三千餘人。釋有生肇融叡等。儒謝靈運費長房等。皆莫敢舉問。什公乃抗聲問曰。君以云何為正見。三藏曰。謂見一切法空。什曰。既空何所見。對曰。見空可非無見。什曰。空可見否。三藏曰。空不可見。什又問。君以云何破色空。三藏曰。色無自體。聚衆微以成色。折色至微。所以色空。什曰。君以折色至微令色空。當云何復破極微空。三藏曰。衆人皆以方分。分之明極微空。吾意不然。什曰。於意云何。三藏曰。由一微故有衆微。由衆微故有一微。微無自性。何折之有。什公聞此。茫然不知是何言說。遂不復問。時衆皆莫達三藏一乘深旨。又宗輔什公乃謂。三藏無答。於是休論。三藏歸院已。生肇寶雲等。又詣問欲決前義云。什公未曉所談。三藏曰。此義難了。吾言甚易。什自燕耳。什後又自問亦如前。答終莫之究。

【書き下し】

仏馱跋陀羅三蔵は、初め関中に至り鳩摩羅什法師に問いて曰く「汝の訳す所の経論は云何」と。什曰く「『法華』『維摩』等の経、『中』『十二門』等の論なり」と。三蔵曰く「君の訳す所は、未だ人度の外に出ざるが如し。何ぞ広く大なる名を置くに足るや」と。時に関中、盛んに三蔵を称し、大論師と為す。他日、秦の主姚興は三蔵に東宮にて持論するを請う。座下の学士三千余人なり。釈に、生、肇、融、叡等有り。儒は謝霊運、費長房等なり。皆、敢えて挙げて問うこと莫し。什公乃ち抗声して問いて曰く「君、云何なるかを以て正見と為すや」と。三蔵の曰く「一切法は空なるを見るを謂う」と。什曰く「既に空なれば、何れか見る所ならん」と。対えて曰く「空を見ることは、見ること無きにあらざるべし」と。什曰く「空は見るべきや否や」と。三蔵曰く「空は見るべからず」と。什又、問う「君、云何なるかを以て色の空を破すや」と。三蔵曰く「色は自体無く衆微を聚めて以て色と成す。色を折して微に至る。所以に色は空なり」と。什曰く「君は折色を以て微に至り、色を空ならしむ。当に云何が復た極微の空を破すべきや」と。三蔵曰く「衆人皆方を以て分つ。之を分ちて極微の空を明かす。吾が意は然らず」と。什曰く「意に於いて云何」と。三蔵曰く「一微に由るが故に衆微有り。衆微に由るが故に一微有り。微は自性無し。何ぞ之を折して有なるや」と。什公此れを聞き、茫然として是れ何の言説なるかを知らず。遂に復た問わず。時衆、皆三蔵の一乗の深旨に達すること莫し。又、宗は什公を輔けて乃ち謂はく「三蔵答えること無し。是に於いて休論す」と。三蔵は院に帰り已る。生、肇、宝雲等は、又、詣して問い前の義を決せんと欲して云く「什公未だ談ずる所暁らめず」と。三蔵曰く「此の義は了し難し。吾が言は甚だ易し。什自ら燕なるのみ」と。什後に自ら問うこと亦前の如し。答えを終に究むること莫し。

【テキスト】p174, a22-b8

幽貞問。此什公論録於一乗。有道形沙門。欲同窺一乗之論。倶聞三蔵之説故。附出此

中。

北齊惠炬法師。幼而厭俗。長業華嚴。十五六年。於道場中。六時禮旋。晝夜誦持。初無懈歇。於寐夢中見一童子。自稱善財。告惠炬言。師既能研精華嚴。欲究佛境。明日向南來。與師聰明藥。令師得悟經旨。惠炬明朝具陳諸僧。遂香湯洗浴。身服淨衣。手執香爐。歸命三寶。願所尋求。必獲如夢。即與童子南行。心口專志。恒念文殊。緣路數里。忽見一池。方圓半里。雜花匝岸有菖蒲。意菖蒲是聰明藥。爰命從童入水採之。忽獲一根大如車軸。歸寺丸合。纔服棗許。使覺輕安神爽。日誦萬言。因獲精解華嚴。造此經疏十餘卷。講經五十遍。

【書き下し】

幽貞問わく「此の什公の論は一乗を録せり。道形の沙門有りて同じく一乗の論を窺がわんと欲して、倶に三蔵の説を聞くが故に、此の中に附出すや」と。

北斉の恵炬法師は、幼くして俗を厭い、長じて『華厳』を業とすること十五、六年、道場中に於いて六時に礼旋し、昼夜に誦持す。初め懈歇[一]すること無く、寐夢[二]中に一童子を見る。自ら善財と称す。恵炬に告げて言わく「師は既に能く『華厳』を研精せり。仏境を究めんと欲さば、明日南に向かい、来たらば、師に聡明薬を与えん。師をして経旨を悟ることを得せしめん」と。恵炬は明くる朝、具さに諸僧に陳ぶ。遂に香湯もて洗浴し、身に浄衣を服し、手に香炉を執り、三宝に帰命し、尋求する所、必ず獲ること夢の如きならんと願う。即ち、童子と南に行く。心口に専ら志し、恒に文殊を念じ、路に縁ること数里にして忽ち一池を見る。方円半里、雑花は岸を匝り菖蒲有り。菖蒲は是れ聡明薬なりと意う。爰に童従り命ぜられ、水に入りて之を採る。忽ち一根の大いさ車軸の如くなるを獲。寺に帰りて丸して合す。纔かに棗許りを服するに覚をして軽安ならしめ、神は爽にして、日に万言を誦す。因りて華厳を精しく解すことを獲。此の経の疏十余巻を造り、経を講ずること五十遍なり。

一「懈歇」怠ること。
二「寐夢」寝ながら夢をみること。

【テキスト】p.174, b9-23

大唐永徽年中。有居士樊玄智。華嚴藏公之
同學。弱冠參道。五經三藏内道被通。專以華
嚴為業。居方洲山中。初餌松葉。六十餘年誦
持不替。五十年前。感其所地涌甘泉。供足
不啻。林生美菓。樹樹繁實。遠近採取。無所罣
礙。忽雨深雪。行李不通。齋糧時竭。於是則有
山神。送藥狀似醍醐。味甘於乳。喫之一匙。
七日不飢。益加心力。身輕目明。若夜禮誦。自
有燈現。晝日誦經。則衆鳥集聽。山神眷屬。現
身圍繞。異香時來。奇菓毎至。有時夜誦。口放
光明。照及四十餘里。光色如金。遠近驚異。或
有人往尋到山。唯見居士誦經口中光明。時
年九十有二。無疾而終。荼毘之時。牙齒變為
舍利。獲百餘粒。悉放光明。數日不歇。于時僧
俗收之。竪塔供養

【書き下し】

大唐永徽一年中に居士樊玄智有り。華厳蔵公の同学なり。弱冠に道に参じて、五経、三蔵の内道は通ぜられ、専ら華厳を以て業と為す。方洲の山中に居し、初め松葉を餌い、六十余年誦持し、替わらず。五十年前、其の居二する所の地より甘泉涌くを感ず。供足啻ならず。林に美菓を生じ、樹樹に実を繁らせ、遠近に採取し、罣礙三する所無し。忽ち深雪を雨らし、行李通ぜず。斎の糧竭くる時、是に於いて則ち山神有り。状は醍醐に似て、味は乳より甘い薬を送る。之を一匙四喫らへば、七日飢えず。心力を益加し、身は軽く目は明るし。若し夜に礼誦せば、自ら燈現れること有り。昼日に経を誦せば、則ち衆鳥集まり

て聴く。山神の眷属は、身を現じて囲繞す。異香時に来たり、奇菓毎に至る。有る時、夜に誦せば、口に光明を放ち、照らすこと四十余里に及ぶ。光色は金の如し。遠近に驚異す。或いは、人往尋して山に到ること有り。唯だ居士の経を誦するに口の中の光明を見る。時に年九十有二なり。疾無くして終わる。荼毘の時牙歯変じて舎利と為る。百余粒を獲て、悉く光明を放ち、数日歇きず。時に僧俗之を収め、塔を竪て供養す。

一 『大正蔵』の対校記に従い「微」の字を「徽」とする。
二 『大正蔵』の対校記に従い「居」の字を加える。
三 「罣礙」さまたげる。
四 『大正蔵』の対校記に従い「題」の字を「匙」とする。

【テキスト】p.174, b24-c10

永徽年中。禪定寺有兩僧。名道祥惠悟。咸隱太白山中。祥即持誦涅槃。悟即持誦華嚴。服餌松木。六時禮懺。晝夜誦持。積有年歲。忽於一時見一居士。鬢髮皓首。所衣潔素。儀容恢美。前來設禮。庠序而言。弊居設齋。欲請一僧。僧曰。此唯二僧。俱往可不。居士曰。弟子貧家。本擬請一僧。僧問意欲交誰行云。請華嚴法師。悟遂赴請。隨居士行。可百餘步。居士於是。騰身於空中問悟曰。師何不昇空。悟對曰。貧道無翅。昇空未得。居士問悟。師猶未得神通耶。悟答曰。實未得。居士却從空下。安致悟於居士衣襟中坐。又令冥目。于時只聞耳邊颼颼風聲。可半食頃。還放履地。遂令開目。不知到處。環視唯見大山。觀其屋宇。皆是湧出。延悟入堂。禮佛纔畢。忽見五百異僧。執錫持盂。翔空而至。

【書き下し】

永徽年中、禅定寺に両僧有り。名は道祥、恵悟なり。咸、太白山中に隠る。祥は即ち『涅槃』を持誦し、悟は即ち『華厳』を持誦す。松の木一を餌服し、六時に礼懺し、昼夜に持誦し、積むこと年歳有り。忽ち、一時に一居士を見る。鬢髪二は皓首三にして衣る所は潔素、儀容は耘だ美なり。前に来たりて庠序四に礼を設けて言わく「弊居に斎を設するに、一僧を請わんと欲す」と。僧曰く「此こには唯だ二僧のみ。倶に往くべきやいなや」と。居士曰く「弟子は貧家にして、本もと擬るに一僧を請う」と。僧、意欲して交も「誰が行かん」と問えば、「華厳法師を請う」と云えり。悟は遂に請に赴く。居士に随い百余歩ばかり行く。居士、是に於いて身を空中に騰らせ悟に問いて曰く「師は何ぞ空に昇らざるや」と。悟は対えて曰く「貧道に翅無く、空に昇ること未だ得ず」と。居士悟に問う。「師は猶未だ神通を得ざるや」と。悟答う。「実に未だ得ず」と。居士は却って空従り下る。悟を居士の衣の襟の中に安致して、坐せしむ。又、冥目せしむ。時に只、耳の辺りに颼颼五たる風の声を聞くのみ。半食ばかりの頃、還た放たれて地を履む。遂に目を開かしめらるも、到る処を知らず。環視するに唯だ大山を見、其の屋宇に皆是れ湧出するを観る。悟を延いて堂に入る。仏を礼すること纔かにして畢んぬ。忽ち五百の異僧を見る。錫を執り、盂を持し、空を翔けて至る。

一 『大正蔵』の対校記に従い「禾」を「木」とする。
二 「鬢髪」頭髪。
三 「皓首」白髪の頭。
四 「庠序」学校。地方の学校。
五 「颼颼」風の音を表す擬音。

【テキスト】p.174, c10-28

悟敬異僧。寧敢居上。遂從下行。居士來語曰。師受持華嚴。是佛境界。何得於小聖下坐。遂却引悟。坐於五百聖衆之上。齋後洗漱已。諸聖便騰空而去。居士乃遣人擎一床寶物。將以嚫悟。令與呪願。悟曰。貧道來不由地。居士携攝至此。自迴不得。請垂送歸。誦經報德。居士曰。本所齋意在師一人。雖有五百羅漢來食。皆臨時相請耳。師且與呪願。當即發遣人。送歸本居。悟與呪願已。庭前有三五童子。各可六七歳。居士呼之。又重標名於一童子遽來。居士語曰。汝可祇事此法師。童子便請於悟曰。師暫開口。悟即依開。童子觀之云。師甚多病。童子即將手。向身上摩。遂取少藥。大如麻子。分為三丸。與悟呑之。又請開口。童子忽飛入口中。悟當時便騰癩。還本所居。住空中謂祥曰。向蒙神仙居士請齋。遂獲神通。今欲暫之蓬萊金闕紫微等宮。以持誦本業。言訖辭祥。攝三衣瓶鉢及所受經。昇空而去

【書き下し】

悟は異僧を敬えば寧ぞ敢えて上に居さんや。遂に下従り行く。居士は来って語って曰く「師は『華厳』を受持す。是れは仏の境界なり。何ぞ小聖の下に坐するを得んや」と。遂に却って悟を引きて五百の聖衆の上に坐せしむ。斎の後、洗漱し已り、諸聖は便ち空に騰りて去る。居士は乃ち人を遣りて一床に宝物を擎げしむ。将に嚫二を以て悟に呪願を与えしめんとす。悟の曰く「貧道来たるに地に由らず。居士、携摂して、此に至る。自ら廻るを得ず。送帰を垂るることを請う。経を誦して徳に報いん」と。居士の曰く「本もと斎する所の意は、師一人に在り。五百の羅漢来たりて食すること有るといえども、皆、臨時に相請うのみ。師は且つ呪願を与えんとす。当に即ち発遣の人なるべし。本居に送帰せん」と。悟、呪願を与え已わると、庭二前に三五の童子有り。各おの六七歳なるべし。居士は之を呼び、又、重ねて一童子の名を標し遽りて来る。居士は語って曰く

「汝、祇に此の法師に事うべし」と。童子は便ち悟に請いて曰く「師は暫く口を開かれよ」と。悟は即ち依りて開く。童子は之を観て云わく「師は甚だ多病なり」と。童子は即ち手を将いて向かい身上に摩す。遂に少薬を取る。大いさ麻子の如し。分かちて三丸と為す。悟に与え、之を呑ましむ。又、口を開くを請い、童子は忽ち口の中に飛び入る。悟は時に当たって、便ち虚に騰り、本もと居する所に還る。空中に住して祥に謂いて曰く「向に神仙の居士の斎を請うるを蒙り、遂に神通を獲」と。今暫く蓬萊の金闕・紫微等の宮に之かんと欲するに、持誦の本業を以てす」と。言い訖りて祥に辞し、三衣、瓶鉢及び所受の経を摂めて、空に昇りて去る。

一 「嚫」銭を与えること。施し。
二 『大正蔵』の対校記に従い「苐」の字を「庭」とする。

【テキスト】p174, c29-p175, a14

顯慶年中。九隴山有一尼師。志精佛乘華嚴祕藏。入山受持。二十餘載。禮誦無替。依教修行。性定心寂。遂證惠眼。得因陀羅網境界。十方世界微塵刹海九會道場。了了明見。如鏡中像焉

總章元年。西域有三藏梵僧。來至京洛。高宗師事。道俗歸敬。華嚴藏公。猶為童子。頂禮三藏。請受菩薩戒。時衆白三藏言。此童子誦得華嚴大經。兼解其義。三藏驚歎曰。華嚴一乘是諸佛祕藏。難可遭遇。況通其義。若有人誦得華嚴淨行一品。其人已得菩薩淨戒具足。不復更受菩薩戒。西域傳記中説。有人轉華嚴經。以洗手水。滴著一蟻子。其蟻命終。生忉利天。而況有人能得受持。當知此童子。於後必當廣大饒益。能施群生無生甘露。

【書き下し】

顕慶年中、九隴山に一尼師有り。志は仏乗『華厳』の秘蔵に精しくす。山に入り受持することと二十余載なり。礼誦して替わること無し。教に依りて修行し、性は定にして、心は寂なり。遂に恵眼を証る。因陀羅網[一]の境界を得、十方世界、微塵刹海、九会の道場、了了、明見なること、鏡中の像の如し。

総章元年、西域に三蔵の梵僧有り。来たりて、京洛に至る。高宗は師事し、道俗は帰敬す。華厳蔵公は猶お童子と為すがごとし。三蔵を頂礼し、菩薩戒を受くることを請う。時衆、三蔵に白して曰く「此の童子、『華厳』の大経を誦して得、兼ねて其の義を解す」と。三蔵は驚歎して曰く「華厳の一乗は是れ諸仏の秘蔵なり。遭遇すべきこと難し。況や其の義に通ずるをや。若し人誦して『華厳』の浄行の一品を得ること有らば、其の人已に菩薩の浄戒を具足するを得。復た、更に菩薩戒を受けず」と。西域の伝記中に説く。「有る人『華厳経』を転じ、洗手の水を以て、滴、一蟻の子に著く。其の蟻の命終わるも、忉利天に生ず」と。而して況や、人の能く受持するを得ること有るにおいてをや。当知るべし。此の童子は、後に必ず当に大饒益を広め、能く群生に無生の甘露を施すべしと。

一 「因陀羅網」『華厳経』で説かれる帝釈天に張りめぐらされている宝網のこと。その結び目には珠玉が付けられていて、互いに映し合い、反映しあっている。

【テキスト】p.175, a15-b4

上元年中。洛州敬愛寺有僧。生縁在鄭州。歸奉覲所親。行及鄭洲界。暮宿店家。次有僧來。不知名號。亦投店宿。與前來僧。並房安置。其後來僧謂主人曰。貧道遠來。疲頓餒乏。主人有酒酤三升。有肉買一斤。具有資直。請速致之。無至遲也。主人遽依請辦。僧盡噉之。其

愛律師。怒而訶之。身披法服。對俗士恣噉酒肉。不知慚愧。其僧默而不答。至於初夜。索水漱口。端身趺坐。緩發梵音。誦大方廣佛華嚴經。初標品題。次誦如是我聞一時佛在摩竭提國寂滅道場。其僧口角兩邊。俱發光明。狀若金色。聞者垂涙。見者發心。律師亦生羨慕。竊自念言。彼酒肉僧。乃能誦斯大經。比至三更。猶聞誦經聲聲不絶。四袟欲滿。口中光明。轉更增熾。遍於庭宇。透於孔隙。照明兩房。律師初不知是光而云。彼客何不息燈。損主人油。律師因起如廁方。窺見金色光明自僧之口兩角而出。誦至五帙已上。其光漸收。却入僧口。

【書き下し】

上元年中、洛州敬愛寺に僧有り。生縁、鄭州に在り。帰りて所親に覲え奉らんとす。行きて、鄭州の界に及び、暮れには店家に宿す。次に僧の来ること有りて、名号を知らず。亦、店に投じて宿し、前に来る僧と並びに房に安置せらる。其の後に来る僧主人に謂いて曰く「貧道は遠くより来たり。疲頓して餧乏す。主人は酒有りて、姓すること三升、肉有りて、買うこと一斤、具に有らば、資すること直なり。速やかに之を致し、遅れて至ること無きを請うなり」と。主人は遽に、請に依りて弁じ、僧は尽く之を噉う。其の敬愛の律師、怒りて之を訶す。「身に法服を披き、俗士に対して恣に酒肉を噉うは、慚愧を知らざるなり」と。其の僧は黙して答えず。初夜に至りて水を索め口を漱ぐ。端身趺坐して緩やかに梵音を発して、『大方広仏華厳経』を誦す。初めに品題を標し、次ぎに、「如是我聞、一時仏在摩竭提国寂滅道場」と誦す。其の僧の口角の両辺より、倶に光明を発す。状は、金色の若し。聞く者は涙を垂れ、見る者は発心す。律師は亦羨慕を生じ窃かに自ら念じて言く「彼の酒肉の僧は乃ち、能く斯の大経を誦す」と。ころおい三更に至って、猶お誦経の声を聞き、声絶えず、四櫨に満たんと欲するがごとし。口中の光明、転た更に増して熾んなり。庭宇に遍し。孔隙に透り、両房を照らし明かす。律師は初め是の光を知らずして云く「彼の客は何ぞ燈を息まざるや。主人の油を損なう」と。律師は因りて起き厠方に如く。金色の光明、自ら僧の口の

両角より出づるを窺い見る。誦して五帙已上に至り、其の光は漸く収まり、却って僧の口に入る。

一 『大正蔵』の対校記に従い「縁」の字を「緩」とする。
二 『大正蔵』の対校記に従い「苒」を「庭」とする。

【テキスト】p.175, b4-21

夜五更誦終六帙。僧乃却臥。須臾天明。律師涕泣。而來五體投地。求哀懺過。輕謗賢聖。願罪消滅

儀鳳年中。西域有二梵僧。至五臺山。齎蓮花執香爐。肘膝行歩。向山頂禮文殊大聖。遇一尼師在巖石間松樹下繩床上。端然獨坐口誦華嚴。時景方暮。尼謂梵僧曰。尼不合與大僧同宿。大德且去。明日更來。僧曰。深山路遙。無所投寄。願不見遣。尼曰。君不去某不可住。當入深山。僧徘徊慚懼。莫知所之。尼曰。但下前谷。彼有禪窟。僧依而住。往尋果見禪窟。相去可五里餘。二僧一心合掌。手捧香爐。面北遙禮。傾心聽經。聆聆於耳。初啓經題。稱如是我聞。乃遙見其尼。身處繩床。面南而坐。口中放光。赫如金色。皎在前峯。誦經兩帙已上。其光盛於谷南可方圓十里。與晝無異。經至四帙。其光稍稍却收。至六帙都畢。其光並入尼口。

【書き下し】

夜、五更に六帙を誦し終わる。僧は乃ち却って臥す。須臾にして天は明きらむ。律師は涕泣して来して五体投地す。哀を求め過を懺し、賢聖を軽謗する、罪、消滅することを願う。

儀鳳年中、西域に二の梵僧有り。五台山に至り、蓮花を齎し、香爐を執る。肘膝行歩し、山頂に向かい文殊大聖に礼す。一尼師の巖石の間の松樹の下、繩床の上に在るに遇う。端然として独り坐し、口に『華厳』を誦す。時に景、方に暮れんとす。尼は梵僧に謂いて曰く「尼は大僧と同じ宿に合わず。大徳よ且く去れ。明日更に来れ」と。僧の曰く「深山の路は遙かなり。投寄する所無し。願わくば遣るを見ざれ」と。尼曰く「君去らざれば、某は住すべからず。当に深山に入るべし」と。僧は徘徊して慚懼す。之く所を知ること莫し。尼曰く「但だ前の谷の下、彼に禅窟有り」と。僧は依りて住す。往尋するに果たして、禅屈を見る。相い去ること五里余りばかりなり。二僧は一心に合掌し、手に香爐を捧げ、北に面して遙礼す。心を傾け経を聴き聆聆たるのみ。初め経題を啓き、「如是我聞」と称し、乃ち遙かに其の尼を見る。身は繩床に処し、南に面して坐す。口中に光を放ち、赫きこと金色の如し。皎[一]は前峯に在り。経、両帙已上を誦し、その光は谷の南方円十里ばかりに盛んにして、昼と異なること無し。経、四帙に至りて、其の光は稍稍却って収まる。六帙に至り都て畢わる。その光は並びに尼の口に入る。

一 「皎」月の明かり。

【テキスト】p.175, b21-28

華嚴經菩薩住處品云。震旦國東北方有菩薩住處。名清涼山。過去諸菩薩。恒於中住。今有菩薩。名文殊師利。與萬菩薩俱。其山在岱洲南折洲東北。名五臺山。首楞嚴三昧經云。文殊是過去平等世界龍種上尊王佛。又央崛摩羅經云。文殊是東方歡喜世界摩尼寶積佛。彼神尼之境界。必文殊之分化。以示梵僧也

【書き下し】

『華厳経』菩薩住処品に曰く「震旦国東北方に菩薩の住処有り。清涼山と名づく。過去に諸菩薩恒に中に住す。今菩薩有り。文殊師利と名づく。萬の菩薩と倶なり[一]」と。其の山、岱洲南折洲東北に在り。五台山と名づく。『首楞厳三昧経』に云く「文殊は是れ過去平等世界の龍種の上尊王仏なり[二]」と。又、『央崛摩羅経』に云く「文殊は是れ東方歓喜の世界の摩尼宝積仏なり[三]」と。彼の神尼の境界、必ず文殊の分化なり。以て梵僧を示すなり。

一 『華厳経』菩薩住処品第二十七には「東北方有菩薩住處。名清涼山。過去諸菩薩常於中住。彼現有菩薩。名文殊師利。有一萬菩薩眷屬。常為説法」（『大正蔵』第九巻、五八九頁ｃ）とある。

二 未検。

三 未検。

【テキスト】p.175, b29-c14

垂拱初年。有中天竺三藏法師日照。遠將梵
典來此傳譯。高宗詔太原寺安置。召集京城
大德僧。共譯大華嚴密嚴等十餘部經。僧道
成薄塵圓測意應等證義。複禮思玄等執筆。
惠智等譯語。時華嚴藏公在寺。因翻譯次問
三藏曰。西域頗有受持一乘獲感應否。三藏
曰。貧道比尋師。至於南天夜。宿一寺有大德
六十餘僧。皆誦華嚴為業。以文殊為上座。寺
僧有亡者。以誦得華嚴經者。次補其處。每
以日暮來集。焚香禮懺。各誦一卷華嚴。以為
恒准。此寺本輪伽烏捨寶造之。緣衆僧誦華
嚴經。其鳥遂感生天。其餘感應甚多。不可備
述。垂拱三年四月中。華嚴藏公。於大慈恩寺。
講華嚴經。寺僧曇衍為講主散講。設無遮會。

後藏公往崇福寺。巡謁大德成塵。二律師。

【書き下し】

垂拱初年、中天竺に三蔵法師日照有り。遠きより梵典を将いて此に来たりて、伝訳す。高宗は詔して太原寺に安置し、京城に大徳の僧を招集し、共に『大華厳密厳』等十余部経を訳さしむ。僧道成、薄塵、円測、玄応等は義を證し、複礼、思玄等は執筆し、恵智等は語を訳す。時に、華厳蔵公寺に在り、因りて翻訳し、次に三蔵に問いて曰く「西域に頗る一乗を受持し、感応を獲ること有るや否や」と。三蔵曰く「貧道は師に尋ぬるころおい、南天の夜に至り、一寺に宿するに、大徳の六十余僧有り。皆『華厳』を誦して業と為す。文殊を以て上座と為す。寺僧の亡一する者有らば、『華厳経』を誦得する者を以て、次に其の処を補う。毎に日暮れを以て来集し、梵香もて礼懺す。各おの一巻『華厳』を誦し、以て恒准と為す。此の寺は本もと輪伽鳥、宝を捨て之を造る。縁りて衆僧は『華厳経』を誦す。其の鳥遂に感じて天に生ず。其の余の感応すること甚二だ多し。備に述ぶべからず」と。

垂拱三年四月中、華厳蔵公大慈恩寺に於いて『華厳経』を講ず。寺僧曇衍、講主と為り講を散ず。無遮会を設け後に蔵公崇福寺に往く。大徳の成・塵三の二律師に巡謁す。

一 『大正蔵』の対校記に従い「已」の字を「亡」とする。
二 『大正蔵』の対校記に従い「其」の字を「甚」とする。
三 『大正蔵』の対校記に従い「薦」の字を「塵」とする。

【テキスト】p.175, c14-29

時塵律師報藏公曰。今夏賢安坊中郭神亮
檀越。身死經七日。却蘇入寺禮拜。見薄塵自
云。頓忽暴已。近蒙更生。當時有使者三人。
來追至平等王所。問罪福已。當合受罪。令付
使者引送地獄。垂將欲入。忽見一僧云。我欲
救汝地獄之苦。教汝誦一行偈。神亮驚懼。請
僧救護。早賜偈文。僧誦偈曰。若人欲了知
三世一切佛應當如是觀心造諸如來。神亮
乃志心誦此偈數遍。神亮及合同受罪者數
千萬人。因此皆得離苦。不入地獄。斯皆檀越
所説。當知此偈能破地獄。誠叵思議。藏答塵
曰。此偈乃華嚴第四會中偈文。塵初不記是
華嚴。猶未全信藏公。乃索十行品撿看。果是
十行偈中最後偈也。塵公歎曰。纔聞一偈。千
萬人一時脱苦。況受持全部。講通深義耶。

【書き下し】

時に、塵律師、蔵公に報じて曰く「今夏、賢安の坊中に、郭神亮なる檀越の身、死して七日を経るも、却って蘇り寺に入り礼拝す。薄・塵を見て自ら云く『頓二に忽ち暴かに亡二し、近きに更生を蒙る。当時使者三人有り。来たりて追って平等の王所に至る。罪福を問い已わり、当に罪を合受し、使者を付して、地獄に引送せしむべし。将に入らんと欲するに垂んとし、忽ち一僧を見る。（僧の）云く『我、汝の地獄の苦を救わんと欲す。汝に一行の偈を誦することを教えん』と。神亮は驚懼して僧に救護を請う。『早三く偈文を賜え』と。僧は偈を誦して曰く『若人欲了知三世一切仏応当如是観心造諸如来（若し人三世一切の諸仏を了知せんと欲せば、応当に是の如く観心して諸の如来を造るべし）』と。神亮は乃ち志心に此の偈を誦すこと数遍なり。神亮及び、合同に罪を受くる者数千万人は此れに因って皆離苦を得、地獄に入らざるなり』と。斯れ皆檀越の所説なり。当に知るべし。此の偈能く地獄を破すことを。誠に思議し叵きなり」と。蔵、塵に答えて曰く「此の偈は乃ち『華厳』第四会中の偈文なり」と。塵は初め是れは『華厳』なりと記さず。猶ほ未だ全く蔵公を信ぜざるがごとし。乃ち十行品を索して撿看

せば、果たして是れ十行の偈中の最後の偈なり。塵公歎じて曰く「纔かに一偈を聞かば、千万人一時に苦を脱す。況んや全部を受持し、講じて深義に通ずるをや」と。

一 『大正蔵』の対校記に従い「傾」の字を「頓」とする。
二 『大正蔵』の対校記に従い「已」の字を「亡」とする。
三 『大正蔵』の対校記に従い「卑」の字を「早」とする。

【テキスト】p176, a1-16

垂拱三年。惠英比丘。從藏公於慈恩寺座下。聽講華嚴已。巡院經行。至翻譯院時。與慈恩弘志法師楚國寺光法師偕行。藏公謂諸德曰。西域有勒那三藏法師。唐云寶意。講華嚴。聽衆數千。忽有二人。形貌端嚴。身光赫奕。於大衆前禮三藏曰。弟子從忉利天帝釋使來。請法師天上。講華嚴經。願垂即行。三藏曰。貧道講猶未畢。未可相隨。畢即依請。使者曰。幾時當畢。三藏曰。猶有兩帙。使者又云。願畢在早。當更親迎。三藏許已。忽即不見。及講欲終纔收經了。使者又來。當時都講梵音維那等。法師於高座上。一時遷化。隨使赴於釋宮。講讚大乘深旨。當知華嚴祕藏。天上人間無不宗重。天授元年。華嚴藏公。歸覲祖母到曾洲。牧宰香花郊迎。至二年。請講華嚴。

【書き下し】

垂拱三年、恵英比丘、蔵公に従い慈恩寺の座下に於いて『華厳』を講ずるを聴き已わり、院を巡り経行す。翻訳院に至る時、

慈恩弘志法師と楚国寺光法師、偕に行く。蔵公は諸徳に謂いて曰く「西域に勒那三蔵法師有り。唐に宝意と云う。『華厳』を講ぜば、聴衆数千人なり。忽ちに二人有り。形貌は端厳にして、身の光は赫奕[一]とし、大衆の前に於いて三蔵に礼して曰く「弟子よ、忉利天従り帝釈の使、来る。請う。法師の天上で『華厳経』を講ずることを。願わくば即ち行くことを垂れたまえ」と。三蔵曰く「貧道は講じて、猶ほ未だ畢わらざるがごとし。未だ相い随うべからず。畢わりて即ち請に依らん」と。使者曰く「幾時に当に畢わるべし」と。三蔵曰く「猶ほ両帙有るがごとし」と。使者又曰く「願わくば、畢わること早[二]くに在らん。当に更に親迎すべし」と。三蔵許し已ると忽ち即ち見えず。講、終わらんと欲するに及び、纔かに経を収め了んぬ。使者、又来たる。時に当たって都講梵音、維那等の法師は高座の上に於いて一時に化を遷し、使に随い釈宮に赴く。大乗の深旨を講讃す。当に知るべし。『華厳』の秘蔵は天上・人間に宗とし、重んぜざること無きことを」と。

天授元年、華厳蔵公帰りて祖母に覲え曾洲に到る。牧宰[三]は香花もて郊迎[四]す。二年に至りて『華厳』を講ずることを請う。

一 「赫奕」光り輝いている様子。
二 『大正蔵』の対校記に従い「畢」の字を「早」とする。
三 「牧宰」唐代における国主の名。
四 「郊迎」郊外にまで出向いて迎えること。

【テキスト】p.176, a16-b3

説法之次議及　諸道士三十餘人。來至講所。面興慍色。口發
邪正。時有少道士。在側歸報弘道觀主。北　麁言。謂藏公曰。但自講經。何故論道門事。藏
寺講師。誹謗道尊。觀主聞之其怒。明晨領　公曰。貧道自講華嚴。無他論毀。觀主問曰。一

切諸法。悉皆平等耶。藏公對曰。諸法亦平等
亦不平等。觀主又問。何法平等。何法不平等。
答曰。一切法不出二種。一者真諦二者俗諦。
若約真諦。無此無彼。無自無他。非淨非穢。一
切皆離。故平等也。若約俗諦。有善有惡。有尊
有卑。有邪有正。豈得平等耶。道士詞窮無對。

猶嗔不解。於如來所。生毒害言。歸觀經一宿。
明朝洗面手。忽眉髮一時俱落。通身瘡疱方
生悔心。歸敬三寶。求哀藏公。誓願受持華嚴
經一百遍。轉誦向二年。猶有十遍未畢。忽感
眉髮重生身瘡皆愈。曾洲道俗。無不見聞。

【書き下し】

説法の次、議するに邪正に及ぶ。時に少き道士有り。側に在り、帰して道観の主に報弘す。「北寺の講師は道の尊を誹謗す」と。観主之を聞きて、甚だ怒る。明くる晨、諸の道士三十余人を領いて講所に来至す。面は慍色を興し、口は麁言を発す。蔵公に謂いて言はく「但だ自らは、経を講ぜよ。何故道門の事を論ずるや」と。蔵公曰く「貧道は自ら『華厳』を講じて、他論を毀すること無し」と。観主問いて曰く「一切諸法は悉く皆平等なるや」と。蔵公対えて曰く「諸法は亦た平等にして亦た不平等なり」と。観主又問う。「何れの法平等にして、何れの法不平等なるや」と。答えて曰く「一切の法は二種を出でず。一には真諦、二には俗諦なり。若し真諦に約さば、此れ無くば彼れ無し、自無くば他無し、浄に非ず穢に非ず、一切皆離れるが故に平等なり。若し俗諦に約さば、善有り悪有り、尊有らば卑有り、邪有らば正有り、豈に平等なるを得んや」と。道士、詞窮して対えること無し。猶お嗔り解けざりて、如来所に於いて毒害の言を生ずるがごとし。観に帰りて一宿を経る。明朝面手を洗う。忽ち眉髪一時に倶に落つ。身を通して瘡疱あり。方に悔心生じて三宝に帰敬し、蔵公に求哀す。『華厳経』一百遍を受持することを誓願し、転誦して二年に向かう。猶お十遍未だ畢わらざるに忽ち眉髪重ねて生じ、身の瘡皆愈ゆるを感ずるがごとし。曾洲の道俗見聞せざること無し。

一 『大正蔵』の対校記に従い「王」の字を「主」とする。
二 『大正蔵』の対校記に従い「其」を「甚」とする。

【テキスト】p.176, b4-18

聖暦元年。則天太后。詔請于闐三藏實叉難陀。與大德十餘人。於東都佛授記寺。翻譯華嚴。僧復禮綴文。藏公筆授。沙門戰陀提婆等譯語。僧法寶弘景波崙惠儼去塵等審覆證義。太史太子中舍膺福衛事參軍于師逸等。同共翻譯。則天與三藏大德等。於內遍空寺。親御法筵。製序刊定。其夜則天。夢見天雨甘露。比至五更。果有微雨。香水之雨。又於內苑庭沼中。生一莖百葉蓮華。綠枝紅葩香艷超倫。蓮花有三種。一人間華有十葉。二天上華有百葉。三淨土華有千葉。今內苑生百葉者。明是天華也。則天嘉此。翻譯瑞應。詔出花樣使中官。送向佛授記寺翻譯之所。舉寺僧衆。及懷洲大雲寺什法師在。悉同觀覩。敬歎希奇。

【書き下し】

聖暦元年、則天太后は詔して于闐三蔵・実叉難陀と大徳の十余人を東都の仏授記寺に請い、『華厳』を翻訳せしむ。僧復礼は文を綴り、蔵公は筆授す。沙門戦陀提婆等、語を訳す。僧法宝、弘景一、波崙、恵儼、去塵等は審覆二し義を證す。太史、太子中舎、膺福衛、事参軍、于師逸等同じく共に翻訳す。則天は三蔵と大徳等に内遍空寺に於いて親しく法筵を御し、序を製し刊定せしむ。其の夜則天は夢に天の甘露を雨らすを見る。ころおい五更に至り、果たして微雨有り。香水の雨なり。又、内苑の庭三の沼の中に一茎百葉の蓮華生ず。緑の枝、紅の葩にして香の艶やかなること超倫四なり。蓮華に三種有り。一に人間

の華、十葉有り、二に天上の華、百葉有り、三に浄土の華、千葉有り。今内苑に百葉生ずるは、是れ天の華なるを明かすなり。則天は此れを嘉び、『瑞応』を翻訳せしむ。詔して出花の様[五]を中官をして仏授記寺の翻訳する所に送り向わしむ。寺僧衆を挙げて、及び懐洲大雲寺の什法師在りて、悉く同じく観覩す。奇希を敬歎す。

一 『大正蔵』の対校記に従い「置」の字を「景」とする。
二 「審覆」二度に亘って調べること。
三 『大正蔵』の対校記に従い「苒」の字を「庭」とする。
四 「超倫」他人よりも飛び抜けてすぐれていること。
五 『大正蔵』の対校記に従い「椽」の字を「様」とする。

【テキスト】p.176, b18-25

至聖暦二年十月八日。譯新經訖。詔請藏公。於佛授記寺。講此新經。至華藏世界品。講堂及寺院。地皆震動。舉衆驚異。都維那惠表僧弘景等。連状聞奏。勅批云。昨敷演微言。弘揚祕賾。初譯之日。夢甘露以呈祥。開講之晨。感地動而標異。斯乃如來降迹。用符九會之文。豈朕庸虚敢當六種之震。披覽來状。欣暢兼懐。

【書き下し】

聖暦二年十月八日に至り、新経を訳し訖る。詔して蔵公を仏授記寺に請い、此の新経を講ぜしむ。華蔵世界品に至り、講堂及び寺院、地皆振動す。衆を挙げて驚異す。都維那、恵表、僧弘景[二]等は連状もて聞奏す。勅批に云く「昨に微言を敷演し、弘揚し賾[三]を秘す。初めて之を訳す日、甘露を夢み、以て祥を呈す。開講の晨、地動きて、異を標するを感ず。斯れ乃ち如来

が迹を降すなり。九会の文に符するを用って豈に朕、庸虚三なるも敢えて六種の震に当四たり来状を披覧五するに欣暢六、兼懐七せんや」と。

一 『大正蔵』の対校記に従い「置」の字を「景」とする。
二 「顊」したあご。悪口、へらずぐち。
三 「庸虚」凡庸で愚かなこと。
四 『大正蔵』の対校記に従い「堂」の字を「当」とする。
五 「披覧」ひらいて見ること。
六 「欣暢」心のびのびと喜ぶこと。
七 「兼懐」かねいだくこと。

【テキスト】p176, b25-c13

聖暦年中。于闐三藏實叉難陀。於佛授記寺。翻譯華嚴。向藏公曰。本國有沙彌。名彌伽薄。持十戒。雖未受具。身意清淨。專誦華嚴。於一日中。有二使者。至作禮。狀貌偉麗。身有光明。彌伽怪異。問所從來。使者對曰。弟子自降忉利。帝釋使來。請師誦華嚴經。願垂即行。伽曰未審。天帝何緣。見命而誦經耶。使者曰。帝與脩羅戰時。毎被凌迫。帝以天眼。觀視閻浮。欲求念誦加護。縱有羅漢。未辦斯事。唯見法師專精華嚴。心遊佛境。可為人天福田。所以見迎耳。師曰。貧道必能有所饒益。豈敢辭耶。於是受請。閉目俄頃便至天宮。帝喜曰。毎被修羅見擾。故屈師來。師受持華嚴。諸天護持。善神影衛。請為誦經。以禳彼敵。帝即脱天冠。擬於癩空。忽然化出殿堂。七寶所成。四門八牖。摩尼衆寶之所莊飾。懸

繒幡蓋。間列花香。以為供養。

【書き下し】

聖歴年中、于闐三蔵・実叉難陀、仏授記寺に於いて『華厳』を翻訳す。蔵公に向かいて曰く「本国に沙弥有り。弥伽薄と名づく。十戒を持し、未だ具を受けざると雖も身意は清浄にして、専ら『華厳』を誦す。一日の中に二使者有り。至って作礼せり。状貌は偉麗にして身に光明有り。弥伽は怪異し、従来する所を問ふ。使者は対えて曰く「弟子、自ら忉利に降りて、帝釈の使として来る。師の『華厳経』を誦するを請う。願わくば即ち行くことを垂れたまえ」と。伽曰く「未だ審らかならず。天帝に何の縁にて命ぜられ経を誦すや」と。使者曰く「帝は修羅と戦う時、毎に凌[一]迫せらる。帝、天眼を以て閻浮を観視るに、念誦の加護を欲求す。縦い羅[二]漢有りて、未だ斯の事を弁ぜざるも、唯だ法師の『華厳』に専精し、心は仏境に遊び、人天の福田と為るべきを見て、所以に迎えらるるのみ」と。師曰く「貧道は必ず能く饒益する所有り。豈に敢えて辞せんや」と。是こに請を受く。目を閉じて俄頃[三]、便ち天宮に至る。帝、喜びて曰く『毎に修羅に擾さる。故に師来るを屈す。師は『華厳』を受持し、諸天に護持せられ、善神に影衛せらる。請う。為に経を誦し、以て彼の敵を禳わんことを」と。帝即ち天冠を脱し、虚空に擬す。忽然として殿堂を化出す。七宝の所成にして四門に八冽あり。摩尼の衆宝の装飾する所なり。繒幡蓋を懸け、間に花香を列し、以て供養と為す。

一 『大正蔵』の対校記に従い「凌」の字を「凌」とする。
二 『大正蔵』の対校記に従い「四」の字を「羅」とする。
三 「俄頃」しばらく。にわか。

【テキスト】p.176, c13-24

請入殿坐蓮花
座。誦華嚴經。經聲寥亮。遍徹天宮。帝釋即
領三十三天四兵侍衛萬衆圍遶。坐於寶臺。
乘空而行。向其鬪所。脩羅軍衆。覩此威靈。即
便退岐。徒侶潛竄於藕孔中。帝釋却請師
天宮。供養施以七珍異寶。帝釋又白師言。若
須長生之藥。亦當奉上。請住天宮。無見辭也。
師曰。割愛出家。求無上道。世間珍異。及長
生事。非所志焉。帝於是五體投地。一心頂禮
曰。願成菩提時。誓相濟脱。莫見棄遺。廼遣使
送還閻浮。所有衣服。皆染天香。終身不滅。後
終願生淨土。實叉三藏。具識此沙彌者矣。

【書き下し】

殿に入りて蓮花の座に坐して『華厳経』を誦することを請う。経声は寥亮一とし、遍く天宮に徹す。帝釈は即ち三十三天を領し、四兵は侍衛し、万衆は圍遶せり。宝台に坐し、空に乗って行き、其の闘う所に向かう。修羅の軍衆は此の威霊を覩て即便ち退岐二す。徒侶は藕の孔中に潜竄三す。帝釈は却って師を天宮に請い供養し施すに、七珍異宝を以てす。帝釈は又、師に白して言く『若し長生の薬を須めば、亦当に奉上すべし。請う。天宮に住することを。辞されること無かれ』と。師曰く『出家を割愛し、無上道を求むるは、世間に珍異なり。長生の事に及んでは、志す所に非ず』と。帝是こに於いて五体投地す。一心に頂礼して曰く『菩提と成ることを願う時、相、済脱することを誓わん。棄遣せらること莫かれ』と。廼ち使を遣りてて閻浮に送還せしむ。有する所の衣服は皆天香に染まり、終身滅せず。後に終りて浄土に願生す」と。実叉、三蔵具に此の沙弥を識るなり。

一 『大正蔵』の対校記に従い「高」の字を「亮」とする。「寥亮」すみとおる音の様。
二 「退岐」退き挫けること。

【テキスト】p.176, c25-p.177, a9

聖暦年中。于闐三藏實叉難陀云。龜茲國中。唯習小乘。不知釋迦分化百億。現種種身雲。示新境界。不信華嚴大經。有梵僧。從天竺將華嚴梵本。至其國中。小乘師等。皆無信受。梵僧遂留經而歸。小乘諸師。廼以經投棄於井經於井中。放光赫如火聚。夜諸師覩之。疑謂金寶。至明集議。使人漉之。乃是前所棄華嚴經也。諸師稍為驚異。遂却収歸經藏中龕安置。他日忽見梵本。在其藏内最上隔。諸師念言。此非我釋迦所説耶。吾見有少異。乃收入藏中。何人輒將向此上隔。又以梵本。置於下龕。僧衆躬鎖藏門。自掌鑰鉤。明日開藏。還見華嚴在其上隔。諸師方悟一乘大教威靈如此。慚悔過責。信慕漸生矣。

【書き下し】

聖暦年中、于闐三蔵・実叉難陀云く「亀茲国中、唯だ小乗を習するのみ。釈迦百億に分化して種種の身雲を現わし、新境界を示すを知らず。『華厳』の大経を信ぜず。梵僧有り。天竺従り『華厳』の梵本を将いて其の国中に至る。小乗の師等は皆信受すること無し。梵僧は遂に経を留めて帰る。小乗の諸師は廼ち経を以て井に投棄せば、経、井中に於いて光赫一を放つこと火の聚まるが如し。夜に諸師は之を覩る。疑いて『金の宝なり』と謂う。明に至り集議す。人をして之を漉わしむ。乃ち、是れ前に棄つる所の『華厳経』なり。諸師稍く驚異を為す。遂に却って経蔵中の収二帰して龕に安置す。他日、忽に梵本を見るに、其の蔵内の最上の隔に在り。諸師は念じて言く『此れ我が釈迦の説く所に非ざるや。吾見るに、少異有り、乃ち蔵中に収入するに、何れの人、輒ち向に此れを上隔に将いるや』と。又、梵本を以て下龕に置けり。僧衆は躬ら蔵門を鎖じ、自ら鑰鉤

三を掌る。明日、蔵を開く。還た『華厳』の其の上隔に在るを見る。諸氏は方に一乗大教の威霊を悟ること此の如し。慚悔、過責し、信慕漸く生ずるなり」と。

一 「光赫」ひかり輝く様。
二 『大正蔵』の対校記に従い「入」の字を「収」とする。
三 「鑰鉤」かぎ。

【テキスト】p.177, a10-21

證聖年中。花陰鄧元英（有本名元爽）有一親友。忽染時患。死經七日却蘇。謂元爽曰。見冥道宮吏將追君父。文案欲成。急修功德以禳之。元英驚懼曰。修何功德。而疾獲免。彼人云。急寫大華嚴經一部。若遲大期不遠。元英乃遽市買紙。向隣寺伏禪師院。請禪師與名召經生。如法護淨。一時書寫。未逾旬日。經已周畢。辦齋慶之。於後遂免斯厄。元英仍依母服哀切在懷。至其冬十一月中。於母墳所舊種寒枯之莖。忽生花葉。芳茗榮艷。五彩含英。斯蓋寫經之感也。洲縣以之聞奏。則天嗟異。賜立孝門。降勅旌表。

【書き下し】

証聖年中、花陰二の鄧元英（有る本、元爽と名づく）一親友有り。忽ち染時に患い、死して七日を経、却って蘇る。元爽に謂いて曰く「冥道を見るに、宮吏将に君の父を追わんとす。文案を成さんと欲す。急いで功徳を修し、以て之を禳え」と。元英、驚懼し曰く「何の功徳を修さば、疾く免を獲んや」と。彼の人云く「急ぎて『大華厳経』一部を写せよ。若し遅れば、大

期二は遠からず」と。元英乃ち、邊に市で紙を買い、隣寺に向かい、禅師院に伏し、禅師を請い名を与え経生を召す。法の如く浄を護り、一時に書写し、未だ旬日を俞えざるに、経巳に周ねく畢わる。斎を弁じ之を慶ぶ。後に遂に斯の厄を免る。元英は母の服に仍依して哀三れみ、切って懐に在り。其の冬十一月中に至り、母の墳所に於いて、旧種の寒枯の茎、忽ち花葉を生ず。茖を芳り、栄艶なりて、五彩は英を含む。斯れ蓋し、写経の感なるや。洲県に之を以て聞奏す。則天、異を嗟く。孝門を立てるを賜り、勅を降し、旌表四す。

一 「花陰」縣の名。華陰。
二 「期」ここでは忌の意味か。
三 『大正蔵』の対校記に従い「免」の字を「哀」とする。
四 「旌表」人の善行を集め、誉めて世間に知らせること。

【テキスト】p.177, a22-b7

如意元年。降洲有二童女。皆性識靜正。妙年依師姑。誦華嚴經。得三十餘卷。師姑戒行。精苦常誦華嚴為業。欲教二女令得剃度。無幾師姑忽然端坐而終。二女朝朝。詣墳所號泣。經於三年。墳上忽生紅蓮五莖。二女覩華感異。益以號慕。忽見一梵僧。神儀甚偉。來問女曰。汝何哀號如是。女對曰。於和尚所。誦習華嚴。志求出家。不圖無感。師姑早喪。僧曰。汝既能懇求剃落。何憂不果。僧乃於懷中。出一甎像方圓六七寸。以授二女。而告之曰。汝將此像。於家供養。不久當獲出家。女得像已禮謝梵僧。少頃忽然不見。女即將歸家。如法供養。精懃信敬。一心無怠。其像方圓。日長一寸。十日間。無日不長。後至丈餘。洲縣

知之。兼花檢覆聞奏。

【書き下し】

如意元年、降洲に二童女有り。皆、性識、静正なり。妙一年、師姑二に依る。『華厳経』を誦して三十余巻を得。師姑は戒行、精苦にして、常に『華厳』を誦するを業と為す。二女に教えて剃度を得せしめんと欲す。幾ばくも無く師姑、忽然として端座して終わる。二女、朝朝に墳所に詣でて号泣す。三年を経て、墳上に忽ち紅蓮、五茎生ず。二女華を覩て異を感ず。益ます以て号慕す。忽ち一梵僧を見る。神儀は甚だ偉なり。来りて女に問いて曰く「汝は何ぞ是の如く哀号せるや」と。女対えて曰く「和尚の所に於いて、『華厳』を誦し習う。出家を志求するも、図らずも感無く師姑は早喪せり」と。僧曰く「汝、既に能く剃落を懇求す。何ぞ憂いて果たさざるや」と。僧は乃ち懐中より一甎三像、方円六・七寸なるを出し、以て二女に授く。而して之に告げて曰く「汝、此の像を将いて家に於いて供養せよ。久しからずして、当に出家を獲べし」と。女、像を得已わりて、梵僧に礼謝す。少頃四にして忽然と見えず。女即ち将いて家に帰り、如法に供養し、精懃し、信敬し、一心に怠ること無し。其の像、方円は日一寸を長じ、十日間、日に長ぜざること無く、後に丈余に至る。洲縣之を知り、花を兼ね五、検覆六し聞奏す。

一 『大正蔵』の対校記に従い「眇」の字を「妙」とする。
二 「師姑」尼僧のこと。
三 「甎」特別な絵などが描かれた瓦。
四 『大正蔵』の対校記に従い「傾」の字を「頃」とする。
五 ここでは「兼」は「献」の音通とし、「兼」を「献じ」と訓ずるべきか。
六 「検覆」しらべて詳らかにすること。

【テキスト】p.177, b7-24

則天異之。詔遣二女兼花。根莖同入發墓。取花乃見花莖透棺而出。破棺取根。根自師始舌上而生。光彩鮮艷。洲縣同見。二女京召入内。則天自手執刀落髮。并賜三衣瓶鉢等。倶配天女寺。因此便出勅天下諸寺。各度僧尼二人。

大足年中。楊洲大雲。有僧弘寶。美儀貌善誦經。毎自恃頴於人。忽然一日眉上鬢下。出一瘤癭。其大如桃。旬日之間。漸長三寸餘。其僧恥之不出房門。於寺醫療。日更增甚。因自思惟。此疾有二因縁。一則過去業感。二由見在輕慢賢聖。遂即發願。於其房中。轉讀華嚴經一百遍。晝夜香花精懇禮懺。轉經至六十遍。夜中忽夢。有人來語之曰。汝欲愈病。吾與汝醫。以手執刀。截却其癭。於便驚覺。至明具向諸僧廣説。於是癭上生瘡。瘡中出膿。經於一月。其疾全瘥。亦無瘡盤。楊洲僧筠。入洛具以此事。説於花嚴藏公。

【書き下し】

則天は之を異とし、詔して二女を遣りて花を兼ね一しむ。根茎同じく墓に入りて発す。花を取れば、乃ち花茎、棺を透して出づるを見る。棺を破りて根を取るに、根、師姑二の舌の上自り生ず。光彩鮮艶にして、洲県同じく見る。二女は京に召され入内す。則天自らの手もて執刀し髪を落とす。並びに三衣、瓶、鉢等を賜う。倶に天女寺に配され、此れに因って便ち勅を天下の諸寺に出して、各おの僧尼二人を度す。

大足年中、楊洲大雲に僧弘宝有り。美儀にして、貌善く経を誦す。毎に自ら恃んで人を頴す。忽然として一日、眉の上、鬢の下に一瘤癭三出づ。其の大いさ桃の如し。旬日の間に、漸く長じて三寸余りなり。其の僧之を耻じて、房門を出でず。寺に於いて医療するも日に更に増すこと甚だし。自ら思惟するに因るに、此の疾には二の因縁有り。一には則ち、過去の業感なり。

二には、賢聖を軽慢するに在ると見ゆるに由る。遂に即ち発願し、其の房中に於いて『華厳経』一百遍を転読す。昼夜に香花もて精懇に礼懺す。経を転ずること六十遍に至って、夜中に忽ち夢みる。有る人来りて之に語らいて曰く「汝、病愈えんことを欲す。吾、汝に医を与えん。手を以て執刀し、其の癭を截り却らん」と。便ち驚きて覚む。明に至りて具に諸僧に向かいて広説す。是の癭上に於いて瘡生ず。瘡中より膿出づ。一月を経て其の疾全く瘥ゆ。亦、瘡盤無し。楊洲の僧筠入洛し、具に此の事を以て、花厳蔵公に説けり。

一 ここでは「兼」は「献」の音通とし、「献ぜしむ」と訓ずるべきか。
二 『大正蔵』の対校記に従い「始」の字を「姑」とする。
三 「瘤癭」こぶのこと。

【テキスト】p.177, b25-c13

西京崇福寺大德惠招法師。或云惠祐。華嚴藏公之同學也。學行精苦。自小師事儼和尚。專業華嚴。偏誦性起一品三卷。新譯名如來出現品。以為恒業。其僧好靜。未居崇福寺。已前久禪誦在山。每於靜夜洗漱焚香。坐於繩床。而誦斯品。忽於一夜正誦經時。而有十餘菩薩。從地踴出。坐蓮花臺。身相金色。光明赫然。合掌跪而聽經。誦經纔終。便沒不見。惠招密向藏公。自説此靈感事。藏公轉向門人惠諒惠雲玄觀如琮等。而説之也

永徽年中。定洲有禪師。名修德。學徒數萬。禪之領袖也。而專業華嚴。欲寫斯經敬為宗故。先以沈香漬水。而種楮樹。樹大取皮造紙。而用寫經。經生筆匠造紙等三人。大小便並皆洗浴護淨。每一卷了。施以十縑。裝染周畢。設齋慶讚。香函盛之。志心禮拜。當設齋日。道

俗雲趨。初開函時。金光遠照。徹百餘里。山東　五十餘洲。皆來禮經開。外道俗無不聞知。

【書き下し】

西京の崇福寺の大徳恵招法師は、或いは恵祐と云う。華厳蔵公の同学なり。学行に精苦し、小なき自り儼和尚に師事し、専ら『華厳』を業とす。偏に性起一品三巻、新訳に如来出現品と名づくるを誦して以て恒業と為す。其の僧は静を好む。未だ崇福寺に居さざる已前、久しく禅し誦して山に在り。毎に静夜に洗漱一し、香を焚き、縄床に坐して、斯の品を誦す。忽ち一夜に於いて正しく誦経する時、十余の菩薩有り。地従り踴り出で蓮花の台に坐す。身相は金色にして光明は赫然たり。合掌して跪きて経を聴く。誦経纔に終われば、便ち没して見えず。恵招は密かに蔵公に向かいて自らこの霊感の事を説く。蔵公は門人恵諒、恵雲、玄観、如琮等に転向して之を説くなり。

永徽年中、定洲に禅師有り。修徳と名づく。学徒数万、禅の領袖なり。而して専ら『華厳』を業と為す。斯の経を写して敬い宗と為さんと欲するが故に、先に沈香を以て水に漬して楮二の樹を種える。樹大なりて皮を取り紙を造りて写経に用う。経生、筆匠、造紙等三人、大小便（のとき）、並びに皆、洗浴し浄を護る。一巻を了る毎に施すに十縑三を以てす。装・染周く畢り、斎を設けて慶讃す。香函に之を盛り、志心に礼拝す。当に斎を設くる日、道俗、雲趨す。初めに函を開く時、金光は遠照し、百余里に徹す。山東の五十余洲、皆来たりて経に礼して開く。外の道俗は聞知せざること無し。

一　『大正蔵』の対校記に従い「瀨」の字を「漱」とする。
二　『大正蔵』の対校記に従い「諸」の字を「楮」とする。
三　「縑」より合わせた糸で堅く織った絹のこと。

【テキスト】p.177, c14-p.178, a1

時有閹人劉謙之。北齊第三王子之從者也
齊太和年中。王子燒身。以供養文殊菩薩。謙
之薄殘缺。乃發心住五臺山。專業華嚴。晝夜
受持。六時禮懺。頻歷歲時。精懇匪懈。乃感文
殊加護。忽然鬚鬢自生。根體具備。聲韻雅朗。
人勘及之。既復形鬚。單懇彌志洞曉經旨。乃
製華嚴論六百卷。
幽貞竊聞。西薩遮倶槃國山中。有具足下本
一十萬偈不思議解脱大方廣佛華嚴經。唯
願此經。早得具足。傳譯此土。普利一切有情。
幽貞以有唐建中癸亥紀。敬發此願。為此歸
命文。於諸禮佛時。次及十二部經而禮之。不
禮佛時。念持此歸命文。華嚴有不可説刹海
微塵數偈品。豈貝葉所能傳寫。皆諸大菩薩
陀羅尼力之所記持。海雲比丘所受持經。以
大海量墨須彌山聚筆。書寫一品。猶不可窮
少分。

【書き下し】

時に閹人、劉謙之有り。北斉第三王子の従者なり。斉の太和年中、王子焼身し、以て文殊菩薩を供養す。謙之は薄さか残欠
[1]たり。乃ち発心し、五台山に住み、専ら『華厳』を業とす。昼夜受持し、六時に礼懺す。頻りに歳を歴する時、精懇し懈る
にあらず。乃ち文殊の加護を感ず。忽然と鬚鬢自から生じ、根、体に具備す。声韻は雅朗なり。人、之に及ぶこと勘なし。既
に復た鬚を形どる。単だ懇ろに弥いよ志し、経旨を洞暁し、乃ち『華厳論』六百巻を製す。

幽貞、窃かに聞く。西薩遮倶槃国山中に、下本一十万偈を具足する『不可思議解脱大方広仏華厳経』有りと。唯だ願わくば、
此の経、早やかに具足することを得、此の土に伝訳され、普く一切有情を利せんことを。幽貞、唐の建中、癸亥の紀有るを以
て、敬い此の願を発す。此れを帰命文と為し、諸の礼仏の時に於いて、次に十二部経に及びて之を礼す。礼仏せざる時、此の

帰命文を念持す。『華厳』に不可説刹海微塵数の偈品有り。豈に貝葉の能く伝写する所ならんや。皆諸大菩薩の陀羅尼力の記持する所なり。

海雲比丘、受持する所の経、大海量の墨、須弥山の聚まりの筆を以て一品を書写す。猶お少分をも窮むべからざるがごとし。

一「残欠」ここでは、闍人であることにより身体の一部分が欠けている意。

【テキスト】p178, a1-17

龍樹祖師。於龍宮見文字結集所傳之經。有上中下三本。上本有十箇三千大千世界微塵數偈一四天下微塵數品。中本有四十九萬八千八百偈一千二百品。下本有十萬偈四十八品。其上中之本。亦非閻浮人力可能受持。所以西域。唯有下本十萬偈經。今在彼國山中。此土所譯八十卷經。梵偈唯四萬五千。於十萬中。乃略出耳。幽貞悲此土經猶未具故。廣發是願。附出此傳。蓋欲勸諸道者見之。皆同禮念哀請。下本經具足。早傳此土也。傳中僧所教檀越神亮誦偈。是前所譯經本也。後譯偈言。

若人欲了知　三世一切佛
應觀法界性　一切唯心造

上元年中。孫思邈服流珠丹雲母粉。年一百五十歲。顏如童子。至長安説齊魏間事。明如目覩。書寫此經七百五十部。

【書き下し】

龍樹祖師、龍宮に於いて文字結集し、伝わる所の経を見るに、上中下の三本有り。上本に十箇三千大千世界微塵数の偈、一

四天下微塵数の品有り。中本に四十九万八千八百の偈、一千二百品有り。下本に十万偈、四十八品有り。其の上中の本、亦、閻浮の人の力もて能く受持すべきに非ず。所以に西域に唯だ下本十万偈の経有るのみ。今彼の国の山中に在り。此の土に訳す所、八十巻の経なり。梵偈は唯だ四万五千のみなり。十万中より、乃ち略出するのみ。

幽貞は、此の土の経は猶ほ未だ具さざるを悲しむが故に、広く是の願を発し、此の伝に附出す。蓋し、諸の道者に之を見んことを勧めんと欲さば、皆同じく礼し、念じ、哀れみ、請う。下本の経、具足せば、早く此の土に伝わるなり。伝中の僧の教える所の檀越神亮、誦する偈は、是れ前に訳する所の経本なり。後の訳の偈に言わく

若し人三世一切の仏を了知せんと欲せば
応に法界性は一切唯だ心造なることを観ずべし

上元年中、孫思邈は流珠[一]、丹[二]、雲母の粉を服し、年[三]一百五十歳なり。顔は童[四]子の如し。長安に至り斉と魏の間の事を説く。明かなること目覩するが如し。此の経七百五十部を書写せり。

一 「流珠」水銀の別名。
二 『大正蔵』の対校記に従い「舟」の字を「丹」とする。
三 『大正蔵』の対校記に従い「生」の字を「年」とする。
四 『大正蔵』の対校記に従い「處」の字を「童」とする。

【テキスト】p.178, a17-b4

太宗欲讀佛經問邈。何經為大。邈云。華嚴經
佛所尊大。帝曰。近玄奘三藏。譯大般若六百
卷。何不為大。而八十卷華嚴經。獨得大乎。邈
答云。華嚴法界具一切。於一門中。可演出大

千經卷。般若經乃是華嚴中一門耳。太宗方悟。乃受持華嚴一乘祕教。亦名大不思議解脱經。功用大故。感應亦大。道者欲學佛心慧。了佛境界。證佛地位。依此一乘法性悔而修行者。不歷地位。初發心時便成正覺。悉與三世諸如來等。譬如衆流一滴之水。纔入海中即名海水。若依大乘二乘權教。備修萬行。綿歷多劫。不知聞是經。以少方便疾得菩提。經云。此經不入一切衆生之手。唯除菩薩摩訶薩。一切聲聞緣覺。不得此經。何況受持。若菩薩億那由他劫。行六波羅蜜。不聞此經。雖聞不信。是等猶為假名菩薩。

【書き下し】

太宗は仏の経を読まんと欲し、邈に問う。「何れの経を大と為すや」と。邈云わく、「『華厳経』は仏の尊する所大なり」と。帝曰く「近ごろ玄奘三蔵『大般若』六百巻を訳す。何ぞ大と為さずして、八十巻の『華厳経』を独り大となすことを得るや」と。邈答えて云わく「『華厳』の法界は一切を一門中に具し、大千の経巻を演出すべし。『般若経』は乃ち是れ『華厳』中の一門なるのみ」と。太宗は方に悟る。乃ち、『華厳』一乗の秘教を受持し、亦、『大不思議解脱経』と名づく。巧用、大なるが故に、感応も亦大なり。道者は仏の心慧を学び、仏の境界を了し、仏の地位を證さんと欲す。此の一乗の法性に依って悔いて修行せば、地位を歴ずして、初発心の時便ち正覚を成じ、悉く三世の諸の如来等に与る。譬えば、衆流の一滴の水、纔かに海中に入らば、即ち海水と名づけるが如し。若し大乗二乗の権教に依らば、備に万行を修し、多劫を綿歴するも、是の経を知らず、聞かず。少なき方便を以て疾く菩提を得。経に曰く「此の経は一切衆生の手に入らず。唯だ菩薩・摩訶薩を除く[一]」と。一切の声聞・縁覚、此の経を得ず。何に況や受持するをや。若し菩薩、億那由他劫に六波羅蜜を行じて、此の経を聞かず、聞くといえども信じざれば、是れ等は、猶ほ仮名の菩薩と為すがごとし。

一 『華厳経』宝王如来性起品には「此經不入一切衆生之手。唯除菩薩。佛子」（『大正蔵』第九巻、六二九頁ｃ）とある。

【テキスト】p.178, b4-10

若有經卷地如
來塔廟。禮拜供養。彼衆生等。具足善根。滅煩
惱患。得賢聖樂。吾徒其勉之。予師事禪祖無
名公側。聞普賢大行海印深定法界體性。方
知華嚴釋氏宗極。所以刊修此傳。廣示未聞
也。
華嚴感應傳一卷

【書き下し】

若し経巻地に有らば、如来の塔廟に礼拝し供養せよ。彼の衆生等は、善根を具足し、煩悩の患を滅し、賢聖の楽を得ん。吾が徒は其れ之に勉めよ。予は禅祖無名公の側に師事し、普賢の大行、海印深定、法界の体性を聞けり。方に『華厳』は釈氏の宗極なるを知んぬ。所以に此の伝を刊修す。広く未聞に示すなり。

『華厳経感応伝』一巻